

大学英語教育における英語の歌の効用

Effects of 'English Songs' in the Teaching
of English in A University

早 田 武四郎 (英語教室)

Takeshiro SODA (Department of English)

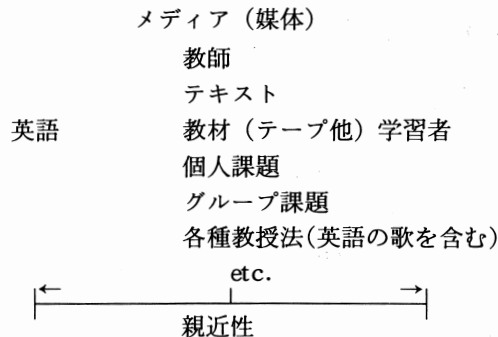
抄録

「英語の歌」と聞けば、楽しいイメージを持つ人は多い。中学校、高校、大学と続く英語学習の中で、英語の歌を教えてもらった経験のある人は、そう多くはないと思われる。筆者も教えてもらった記憶がない。教えてもらったなら、さぞ楽しいだろうなと思ったことがある。そのような思いが、教師になってからの筆者に、英語の歌を授業に取り入れさせることになった。取り入れるといっても、年に1、2回であった。大学生を対象とするようになってから、1983年度、英語の歌をグループ・ワークの課題にしたことがあった。この時は、何もしない群と比べて有意差は現れなかった。8年後の1991年、英語の歌のテキストとテープ（歌詞の朗読、カラオケ付き、米国の女性歌手吹き込み）を受講生全員に購入させ、授業外に自習させた。そして後期の定期テストの前に英語の歌のテストを行った。本稿はこの時のデータによって英語の歌の効果を検討する。

キー・ワード：楽しいイメージ、親近性の高いメディア、英語授業の活性化、学習意欲の増進、学習転移

I. はじめに、

英語授業の活性化については、いろいろな方法があるであろう。筆者は英語教育・活性化の概念構成図を次のように設定した。



第1図 英語と学習者間のメディア (媒体)

すなわち、英語と学習者間には親近性の高いメディアと低いメディアがある。また、学習転移性の高いメディア、低いメディアがある。親近性の高いメディアは大体、学習転移性も高いように思われる。英語教師は親近性の高いメディアを出来るだけ多く、英語教育に活用しなければならない。教師自身も最も重要なメディアであり、親近性の高い場合と低い場合があり、高いメディアになるように努めなければならない。

英語の歌はもともと、楽しく、明るいイメージがあり、これを旨く指導に取り入れることは学習者の英語のイメージを良くし、学習意欲を高め、増進すると考えられる。本稿は1991年に行った実験によって、英語の歌の効果を検討することを目指している。

II. 研究の目的

大学英語教育において、英語の歌を上手に唄うことは、その後2週間以内に行われる後期英語定期テストの得点の向上を促進するかどうかを明かにすることである。

III. 仮説

大学英語教育において、英語の歌を上手に唄うことは、唄わない場合と比べて、その後2週間以内に行われる後期英語テストの得点を向上させる。

[等質性検定のための、4月英語共通テストは速読一、リスニング一、基礎学力一、クローズ・テストで構成されている。また、有意性検定のための12月英語定期テストは10個の文の空所補填、同意語、反意語、和文英訳、英問英答、単語の意味、英文和訳で構成されている。]

III. 本研究、英語の歌を上手に唄うことと英語学習の関係（仮説設定の根拠）

英語の歌を上手に唄うことは、もって生まれた音感もさることながら、歌詞やメロディー等を覚える記憶力、学力が優れている場合が多いと思われる。一方、授業に馴染み、良い感じで学習していれば英語の歌にも、落ち着いて、しっかりと、取り組めるかも知れない。

IV. 実験

1. 実験の方法（t検定）

（詳細は後掲の表1、表2参照）

被験者	D大学	1年生	12名
		2年生	54名
		計	66名

(a)等質性の検定

4月共通テスト $p > .05$ n.s.

(b)有意性の検定

後期定期テスト $p < .01$ s.

2. 実験材料

教材選択の基準

歌詞, メロディー, ともに一般的なもので, 誰にも理解され, 楽しめる歌を考えた。その結果, 一冊のテキスト⁽¹⁾に納められた30曲の歌を選んだ。学生はこのうちの1曲を任意に選び, テスト時に教卓のところに出て, フロアに向かって立ち, 唄った。

V. 実験の結果

表1 等質性の検定 SD. 平均値 被験者数 t検定結果

項目	英語の歌実施(上位)群	英語の歌非実施群
SD.	8.92	13.44
平均値	58.83	60.39
被験者数	38	28
テスト	4月テスト〔速読(25)+聴解(25)+基礎学力(25)+クロス ² (25)〕 信頼性係数(r)=0.863 (キュータ ³ - リチャート ³ ソン公式21による)	
満点	100	
t検定結果	t = -0.53 tの表にて 両側検定 df=64 t. _{.05} =2.000 p > .05 n.s. t. _{.01} =2.660	

表2 有意性の検定 SD. 平均値 被験者 t検定結果

項目	英語の歌実施(上位)群	英語の歌非実施群
SD.	14.01	15.34
平均値	65.16	53.07
被験者	38	28
テスト	後期英語定期テスト〔空所補填+同意語+反意語+和文英訳+英問 英答+単語の意味+英文和訳〕 信頼性係数(r)=0.925 (キュータ ³ - リチャート ³ ソン公式21による)	
満点	104	
t検定結果	t = 3.23 tの表にて, 片側検定 df=64 t. _{.05} =1.671 ∴ p < .01 s. t. _{.01} =2.390	

VI. 結果

大学英语教育において英語の歌を上手に唄うこと（10点評価で6.5点以上）は、唄わない場合と比べて、その後2週間以内に行われる後期英語定期テストの得点を向上させるという仮説は検証された。

VII. 結果の考察

1983（昭和58）年9月に行った実験では、3つのグループ課題のうちの1つとして用いた。抽選で英語の歌に当たった班は2班で人数は10名であった。この場合は実験群と統制群の間に有意差は現れなかった。

今回、実験群と統制群に有意差が出たのは手法が異なったことが最大の原因と思われる。すなわち、前回のように班課題としてではなく、個人課題として課したこと、被験者は4月当初に内容がきちんとしたテキストと歌詞朗読、歌とカラオケが吹き込まれたテープを購入したこと、最も好きな歌を1曲、テキストの30曲の中から選び、教壇で唄ったこと、10点満点で6.5点以上を選び実験群としたこと等が1983年に行った場合と違っていた。このようなことが結果に影響したと考えられる。

VIII. 結び

英語の歌の効果は1見、漠然としていて、判然としない面がある。しかし、教室内の雰囲気明るく、楽しくし、ひいては英語を好きにさせ、また、指導が良好であった場合、教師へのイメージを良くする効果があることは常識で考えても分かることだが、その後2週間以内に行われる英語テストで成績を向上させる傾向があることは、筆者自身も自信がなかった。なぜなら、1983年に行った実験の結果が先入感として、あったからである。今回、英語の歌を1人ひとりに課題として学習させ、後期末にテストをすることが、その後、2週間以内に行われるテストで成績を向上させる傾向のあることが示唆されたことは、英語の歌の活用の際に、明るい視点を加えるものと考えられる。

註

- (1)佐藤 喬・神野 真寿美 共著「10分間思い出の名曲」Music and Memories
— Let's Take A Singing Break! — (株)ニュー・カレント・インターナショナル
1992

参考文献

- 1) 註(1)参照
- 2) 「大学英语教育における‘演習型学習’の実験と考察」『北海道東海大学紀要』第6号
29-36 1985